

ベラルーシの歴史と文化

辰巳雅子

ベラルーシ共和国

面積は 20 万平方 km で日本の約半分。北部と中部は平原と丘陵（最高点海拔 343m）で、南部にはドニエプル川の支流プリピャチ川に沿ってポレーシエと呼ばれる沼沢地帯が広がっている。年間降水量は約 600mm で国土の 3 分の 1 が森である。人口は約 1000 万人で、その 81% がベラルーシ人、ついでロシア人（11%）、その他にポーランド人、ウクライナ人など。公用語はベラルーシ語で、ロシア語は準公用語。農業では、ジャガイモ、ライ麦、テンサイなどが栽培され



酪農も盛ん。工業では、農業機械、電器、石油化学など。国民一人当たり所得は約 1600 ドル（2003 年）で、通貨はベラルーシルーブル。（外務省ホームページなどより）

ベラルーシ共和国はソ連の崩壊にともない 1991 年に誕生した国である。しかし当然のことながら、それ以前にもその土地には人々が暮らし、長い歴史を積み上げ、独自の文化を創り上げてきた。日本人の間にはベラルーシという国のイメージははっきりと沸いてこない。ベラルーシを世界的に知らしめているのは、チェルノブイリ原発事故の被害が甚大であったことである。確かにその通りなのだが、ベラルーシの国のイメージとはそれだけなのであろうか。

チェルノブイリ原発被災児の保養受け入れを行っている日本の救援団体の活動を、ボランティアで手伝ったことがある。日本人関係者の多くがベラルーシ人の子どもを里親として受け入れ、また受け入れた里子に会いにベラルーシを訪問するなど、ベラルーシ人と接触する機会を持っているにもかかわらず、ベラルーシについては詳しい知識を持っていなかった。単に「かわいそうな国」「ロシアと同じなのでは？」と思っていることが多かった。そういう自分も以前からベラルーシのことがよく分かっていたのか、というところではない。日本人の間でベラルーシという国が、あまり知られていない理由の一つは、日本語でベラルーシについて詳しく紹介している資料などが少ないためだろう。

ベラルーシはソ連時代、ロシアとの同化が進んでいた。それには長所も短所もあるのだが、短所を挙げれば、「ベラルーシとロシアとの違いがなくなり、ベラルーシの持つ独自性が薄れていった。」ことであろう。ソ連時代はベラルーシ語人口が減り、ロシア語人口が増えた。学校ではソ連の歴史は学んでも、ベラルーシの歴史は教えられなかった。ロシア語は小学校 1 年生から習うのに、ベラルーシ語は外国科目の扱いだった。しかしソ連が崩壊し、ベラルーシは独立し、ベラルーシ語の書籍の出版も増え、ベラルーシの歴史もベラルーシ語も義務教育科目の一つとなった。

こうしてベラルーシという国が、独立した国としてまとめられたのだが、国の紹介はそれまでのロシア語強化政策の反動からか、ベラルーシ語で書かれることが多かった。そのため、マイナーな言語であるベラルーシ語で書かれたベラルーシの歴史や文化などの情報は外国人に伝わりにくいもの

であった。たとえば1990年代初めにベラルーシの歴史の本が出版されたが、内容は全てベラルーシ語であり、それをロシア語へ、さらに日本語へ訳しながら読むと、ソ連時代にロシア語で書かれた百科辞典等に掲載されているベラルーシの歴史の内容に比べ、ずいぶん詳細である。また日本人には全く紹介されてこなかったベラルーシ史実が書かれている。

このような詳細な資料をもっと多く日本語に訳せば、ベラルーシに対する日本人の情報、イメージも大きく膨らみ、鮮明化するだろう。しかし日本にはロシア研究者は数多くいても、ロシアの周辺諸国についても関心を持っている人が少ないため、なかなかベラルーシ研究は進んでいないようだ。

ロシア語に堪能で、大学で教鞭を取っているというロシアに関しては博識の日本人と10年ほど前、話をしたことがある。その人の頭の中では、ベラルーシは文化的水準がロシアと比べて格段に低く、経済的にも非常に貧しい国で、首都のミンスクなどは、一言で言えばモスクワからずっと離れたロシアの外れにある地方都市ぐらいにしか思っていないようだった。その人に私が「ミンスクには地下鉄が2本通っています。」「ミンスクの面積は京都の3倍はありますよ。」「第2次世界大戦前からバレエ・オペラ劇場があって、ベラルーシのバレエはモスクワのボリショイ劇場に勝るとも劣らないレベルだと、ロシア人から言われています。」「中世に建てられた古城が各地にたくさんあります。」などと話したところ、「えっ！ それ本当ですか？ 私、ベラルーシについて大きな誤解をしていたかも。」と目を丸くされた。ロシア（ソ連）の専門家ですら、ベラルーシのことはよく知らないのである。ましてや一般人はなおさらであろう。

そういう私自身はミンスクで暮らし始めて10年経ち、ベラルーシのことを少しずつ知るうちに、新鮮な驚きを何度も感じてきた。前述のロシア専門家ではないが、目を丸くすることの連続だったと思う。日本ではあまり知られていないベラルーシのことを知る驚きをこの場を借りて、多くの人々と少しでも分かち合いたいと思っている。

◇ ベラルーシの歴史

一つの国のことを学ぶとき、歴史について知るのは大変重要だと思う。ただ、ロシアやソ連の歴史は、日本人が日本語で知る方法は多くあっても、ベラルーシの歴史自体は独立した形ではあまり紹介されていない。それもベラルーシの歴史、と言っても、「ベラルーシ共和国」のとしての歴史は1991年に始まるため、10年ほどの長さしかないことが、一因だろう。

ここで簡単にご紹介する「ベラルーシの歴史」は「現在ベラルーシと呼ばれている地域」の歴史である。以下、「ベラルーシで」という表記は全て「現在ベラルーシと呼ばれている地域」と置き換えながら読んでいただきたい。なお、ベラルーシには石器時代から人が住んでいたが、6世紀以前の歴史については年表では省略する。

（ベラルーシ歴史年表）

6-8世紀ごろ	バルト系民族が居住。その後スラブ系民族が流入し、各地で集落を形成し、農耕を行っていた。
859年	年代記にクリビチ人の共同体についての初の記述。このころベラルーシの北部にクリビチ人、南部にドゥリガビチ人、東部にラジミチ人という古代民族が住んでいた。彼らがベラルーシ人の共通の先祖とされている。当時使われていた言語は古期ロシア語という古語で、この言語からベラルーシ語、ロシア語、ウクライナ語が分化したと考えられている。
862年	ベラルーシ北部にクリビチ人の町としてポーロツクの存在が年代記に記述される。（現在のポーロツク市）当時はクリビチ人の間で町の権力者（ポーロツク公）を決め

	ていた。
9 世紀末	ポーロツク公国がキエフ・ルーシの支配下に入る。
10 世紀中頃	スカンジナビアからやってきたと伝えられるラグバロドがポーロツク公となる。ベラルーシの歴史で初めて具体的に登場する人名である。
980 年(970 年、975 年、976 年の説有り)	ポーロツク公国がキエフ・ルーシ公ウラジーミルの軍に攻められ、壊滅的な被害を受ける。ラグバロドの娘ラグネダはウラジーミルと結婚。後のキエフ・ルーシ公、ヤロスラフ賢公などの母となる。
11-13 世紀	ポーロツク公国 (ベラルーシ北部)、トゥーラフ公国 (南部)、ノボグールドク公国 (西部) などがキエフ・ルーシの支配下で成立。
1230 年代から 14 世紀後半	現在のベラルーシ共和国の領土のうち西半分がリトワニア大公国、東半分がロシアの支配下に入る。リトワニア大公国の公用語は初期ベラルーシ語と定められる。リトワニア人はリトワニア語を持っており、口語として使用し続けていたが、リトワニア大公国の歴史の記述などは初期ベラルーシ語で書かれることになった。
1237-1241 年	ベラルーシ各地で来襲したタタール人 (モンゴル帝国) との戦いが起こる。しかしタタール人による本格的な支配はなかった。
1558-1583 年	リボニア戦争。(リトワニア大公国とロシアの間で起こった戦争。) ベラルーシが戦場となる。
1569 年	リトワニア大公国がポーランド王国と連合し、事実上の従属領となる。現ベラルーシの西半分の地域もポーランド王国の支配下に入る。ポーランド化が進められる。
1654 年-1667 年	ロシア・ポーランド戦争。ベラルーシ領域が荒廃し、290 万人いたベラルーシ人人口が 140 万人に減少。
1696 年	リトワニア大公国の公用語がベラルーシ語からポーランド語に代わる。口頭以外のベラルーシ語使用が禁止される。
1700-1721 年	北方戦争 (スウェーデンとロシア、ポーランド、デンマークなどとの戦争) ベラルーシ人人口が 80 万人に減少。
1795 年	第 3 次ポーランド分割によりリトワニア大公国が解体。現ベラルーシ全域は帝政ロシアの支配下に入る。その後ロシア化が進められる。
1812 年	ベラルーシはナポレオンのモスクワ遠征 (祖国戦争) の通過地点となる。
20 世紀初頭	ロシアでの社会主義運動の高まりに連動して、ベラルーシでもベラルーシ人による政治活動が増加する。
1914 年	第一次世界大戦勃発。ベラルーシ西部地域がドイツ軍に占領される。
1917 年	ロシア革命起こる。
1818 年 3 月 3 日	ソビエト・ロシアがブレスト・リトフスク条約に調印し、ベラルーシの一部を含む領土の権利を放棄した。
1918 年 3 月 25 日	ドイツ軍占領下でベラルーシ人民共和国が独立を宣言。
1918 年末-1919 年初め	ソ連赤軍によって占領から解放される。それに伴い、ソビエト・ロシアによる支配が始まり、ベラルーシ人民共和国は実質上消滅。
1919 年 1 月 1 日	ソビエト・ロシアにより、白ロシア・ソビエト社会主義共和国が樹立。公用語はロシア語となったが、ベラルーシ語使用は解禁された。
1919 年 2 月	白ロシア・ソビエト社会主義共和国とリトワニア・ソビエト社会主義共和国が統合される。(リトベル共和国の誕生。)
1920 年 4 月	ポーランド軍が侵攻。ポーランド・ソビエト戦争始まる。リトベル共和国の瓦解。
1921 年 3 月	ポーランドとソビエトのリガ条約調印により、ベラルーシの西半分の地域がポーランド領になり、東半分は白ロシア・ソビエト社会主義共和国に定められる。
1922 年	東半分の地域 (白ロシア・ソビエト社会主義共和国) がソ連邦に正式に加盟。
1939 年 9 月 1 日	ドイツ軍がポーランドに進攻。第二次世界大戦勃発。約 2 週間後、ポーランド国内の混乱に乗じ、ポーランド領だったベラルーシ西半分の地域は白ロシア・ソビエト社会主義共和国領域に戻される。さらに一部のポーランド地域が白ロシア・ソビエト社会主義共和国に組み込まれる。
1941 年 6 月 22 日	ドイツ軍がソ連に進攻。大祖国戦争始まる。間もなく白ロシア・ソビエト社会主義共和国全域がドイツ軍の占領下に置かれる。戦時中国民の 4 人に 1 人が死亡。
1944 年 7 月	白ロシア・ソビエト社会主義共和国各地の都市がドイツ軍の占領から解放される。
1945 年 5 月 9 日	ソ連の勝利。大祖国戦争の終結。

1945年8月	白ロシア・ソビエト社会主義共和国に組み込まれていたポーランドの一部地域がポーランド領に戻される。(現在のベラルーシ領の国境が決定。)
1945年6月	白ロシア・ソビエト社会主義共和国が国連に加盟。
1965-1980年	ピョートル・マシエロフが第1書記を務める。(事実上の白ロシア・ソビエト社会主義共和国の元首)
1979年	ソ連のアフガニスタン侵攻。多数のベラルーシ人兵士戦死者を出す。
1986年4月26日	チェルノブイリ原発事故発生。事故当時、風下に当たった白ロシア・ソビエト社会主義共和国は甚大な被害を受けた。
1990年7月27日	ベラルーシ最高会議が国家主権宣言を採択。
1991年8月25日	国家主権宣言をベラルーシ最高会議が承認し独立宣言。
1991年9月19日	正式国称をベラルーシ共和国に改称。
1991年12月	独立国家共同体(C I S)が創設。ソ連が崩壊し、ベラルーシ共和国の独立も決定した。
1992年	独自通貨ベラルーシ・ルーブルを導入。
1994年	現大統領ルカシェンコが大統領に就任。
1995年	公用語をベラルーシ語とロシア語の二つに制定。ロシアとの統合を目指す政策が強化されている。

ベラルーシの歴史を眺めていて、目を引く事項とは、他民族からの支配、強制される異民族化政策、地理的条件から戦場になり、戦渦に巻き込まれる悲劇である。ベラルーシはまずキエフ・ルーシに支配され、次にリトワニア大公国、ポーランド、ロシアに支配され続けてきた、と紹介されることが多い。確かにその通りなのであるが、これは裏返せば、ベラルーシが地理的に好条件の場所にある、ということになる。周辺国に干渉させられ続けたベラルーシの歴史を「そうではない」と覆すつもりはないが、このうち「リトワニア大公国から支配されていた」という紹介は誤解を招く表現だと思う。

リトワニア大公国の支配を受けていたとは言え、ベラルーシ各公国には自治権が認められていた。またバルト海から黒海まで領土を拡大したリトワニア大公国のほぼ中心に位置したベラルーシは交易が盛んとなり、大いに繁栄していた。リトワニア大公国の公用語は初期ベラルーシ語に定められていた。リトワニア人はリトワニア語を持っており、口語として使用し続けていたが、リトワニア大公国の歴史の記述などは初期ベラルーシ語で書かれていたのである。これは初期ベラルーシ語のほうが書き文字として発達していたためでもあり、またもともとリトワニア大公国がベラルーシ地域にあった一公国ノボグールドク公国が台頭して誕生した国だから、という経緯があるからである。

ベラルーシを他国から支配され続けてきた悲劇の国、と紹介するのはこの国のことを半分しか言いえていないように思える。ベラルーシもリトワニア大公国時代は、繁栄していたのである。当時、ベラルーシを流れる河川には帆を膨らませた商船が行き交い、各都市の岸边には市場が作られ、財力を持った商人たちがそれぞれに館を構えていた。ベラルーシの地理的条件は、長所を言えば、交易に有利である点であり、短所は戦時、戦禍に巻き込まれやすい、という点であろう。

キエフ・ルーシ時代はベラルーシ最古の都市、ポーロツクが壊滅的被害を受け、ポーロツク公ラグバロドがキエフ公ウラジーミルに殺害され、娘ラグネダがウラジーミルと結婚させられるという悲劇があった。しかしキエフ・ルーシの対諸公国政策により、ポーロツク公国はその後復興し、ポーロツク公ラグバロドの子孫がベラルーシ各地の公国を治めることになった。

またキエフ・ルーシがキリスト教(正教)を受け入れたことにより、ベラルーシ地域でのキリスト教の普及は10世紀末、とかなり早い時期に始まっている。キリスト教の普及が、その後のベラルーシ地域における多くの知識人誕生に大きな影響を与えたのは言う間でもない。有名などころではポーロツク公女であり、宗教家でもあった聖女エウフラシニャ・ポーロツカヤ(11世紀末?-117

3?)、宗教作家のキリラ・トゥラウスキー(1130-1181)、ベラルーシ語による最初の書物(聖書)を印刷、出版したフランツィスク・スカリナ(1490?-1551?)、ベラルーシ語による初の「カテキズム(キリスト教の教義問答書)」の筆者であるシモン・ブードヌィ(1530-1593)、ロシア皇帝一家の家庭教師をしていた宗教家シメオン・ポーロツキー(1629-1680)など、知識人の多くはキリスト教徒であった。

リトワニア大公国時代以降ではベラルーシの「ポーランド化」あるいは「ロシア化」が強制され、各公国の自治権は急速に弱められていく。しかし、このポーランドによる支配によって、ベラルーシの地も16世紀から17世紀にかけて、ポーランド経由で波及したルネッサンス文化の洗礼を受けることになった。またバロック様式やロココ様式の建築や美術様式も取り入れられていくようになった。周辺国による支配という表現にはマイナスのイメージがつきまとうが、プラスの要素も持ち合わせているのである。

確かにベラルーシは戦争による被害を何度も受け、そのたびにベラルーシ人口が激減している。この宿命が第2次世界大戦まで続いた。さらに1986年にチェルノブイリ原発事故が発生すると、偶然風下にあったベラルーシに放射能が降り注ぎ、甚大な被害を受けた。

現代のベラルーシ人にベラルーシのことを教えてください、と頼むと、まず第2次世界大戦の被害の大きさ、次にチェルノブイリ原発事故のことを口にする。どちらも記憶に新しい20世紀の出来事である。実際に体験している世代が生きており、また過去のベラルーシの歴史を学ばなかったソ連世代も生きている現代では、この二つの悲劇がベラルーシを象徴する最大の出来事なのであろう。ベラルーシ人自身も「ベラルーシ人は悲劇の民族。我々は常に被害者だ。」と認めている。

このほか、現在のベラルーシの経済状況が悪い、といった愚痴もベラルーシ人から聞かされる。これも同様「悲劇の民族。被害者の民族」という意識の表れのように思える。それではベラルーシ人には自分たちに定められた悲劇の運命から抜け出そうとするような覇気がない、諦めの哲学を持った民族なのだろうか。

「ベラルーシ人はまずキエフ・ルーシに支配され、次にリトワニア大公国、ポーランド、ロシアに支配され続けました。」という紹介の仕方を日本人にすると、すぐさま「じゃあ、ベラルーシ人はウクライナ人もリトワニア人もポーランド人もロシア人も嫌っているのですね。」という人がいる。

しかし、実際にはベラルーシほど人種差別の行われなかった国はなかったのではないかと、思われる。外国人差別を常に感じながらベラルーシで暮らしている日本人は皆無だろう。またヨーロッパ中でユダヤ人が差別を受けていた時代、ベラルーシはユダヤ人の居住を受け入れ、都市部のユダヤ人人口は10人に1人と言われた。民族構成人口別に見るとベラルーシ人、ロシア人、ポーランド人、ウクライナ人に続いてユダヤ人人口が多く、19世紀にはベラルーシ人の次にユダヤ人が占める割合が大きかった、という都市も存在したのである。

ベラルーシ人自ら「私たちは外国人差別などしない、穏やかな気性を持った民族です。」とベラルーシ人の長所として挙げる。このことを前述の日本人に話すと「どうしてですか？ だって周辺民族に迫害され続けてきたのでしょうか？ それらの民族に対して憎しみの感情を抱かないのですか？」と反論される。ところがベラルーシ人は周辺諸民族と民族紛争を起こすこともなく、仲良くやっているのである。前述のように他民族からの支配を受けていたといっても、マイナス要素ばかりではなかったことが、その理由の一つであらう。

そしてまた、他民族からの支配を受けながら、生き抜いていくために八方美人的に対処しなくてはいけなかったことも理由だろう。もし、ロシアやポーランドからの支配にそのたびベラルーシ人が徹底的に抵抗していたら、壊滅的に滅ぼされるか、迫害されていたのではないか。そのため極端にベラルーシ人人口が減少していれば、今日のベラルーシという国家も誕生しなかっただろう。

こうして被害者意識を持ち、諦めの哲学を持ったベラルーシ民族が生まれた。よく言えば、処世に長け、上手く生き延びてきた民族である。適度に周辺諸民族と付き合い、良いところは取り入れ、おとなしくそして巧みに生きてきたのである。先人たちの知恵により、ベラルーシ人は今日まで生き延びてきた。おかげで、ロシアのチェチェン問題のような、民族紛争も国境問題も皆無であり、国内の民族差別もない。宗教もキリスト教の分派であるスラブ正教とカトリックの二派が国民の大部分を占めており、それにイスラム教がからむといった複雑な宗教地図も持たない。

表面的には大変平和な国である。この国に日常的に居住する外国人の一人である私としては幸いであり、ベラルーシ人に感謝しなくてはならない。

「ベラルーシ人とは被害者の民族である。」と諦観の哲学に首まで浸かっているベラルーシ人も大勢いるが、諦めるばかりではなく、経済の低迷回復にしろ、もっと自助努力をするなどすればいいのに、と思う外国人も多い。確かに「被害者である。」というばかりで、何も努力しないベラルーシ人の態度はあまり好ましくない、と思う。しかし、この国が正式に独立国家になってから10数年しか経っていない。10年以上も経過したではないか、と思う日本人もいるだろうが、長い歴史年表を眺めていると、10年というのは非常に短い時間であり、急激に人間は変化できないのではないかと感じられる。

真の意味でのベラルーシ人、新ベラルーシ人が誕生するのはもう少し後の時代なのかもしれない。そのとき初めて、ベラルーシという国の誕生プロセスも完了するのではないだろうか。

◇ ベラルーシの文化

民族の文化というものは、その民族が持つ歴史や、代々住み続けてきた土地の風土が作り上げる物だと思う。ベラルーシの場合を見てみると、現在これがベラルーシの文化であると言える物は多数存在する。ベラルーシ語によって書かれたベラルーシ文学、ベラルーシ民謡、ベラルーシ料理など項目は多種多様である。ベラルーシ語は古くから文章語として確立し、リトワニア大公国の公用語として、文書や記録の際に多く使用されたが、歴史の変遷により17世紀末には口頭以外の使用を禁止されたため、ベラルーシが文学として発達するのは20世紀に入るまで待たなくてはならなかった。

ベラルーシ文学の基礎を築いたのはヤンカ・クパーラ（1882-1942）とヤクブ・コーラス（1882-1956）の二人である。両者とも、ベラルーシの農村地域の出身であったが、自らの努力により教養を身につけ、ベラルーシ語による近代文学というジャンルを確立した。その作品は詩、小説、戯曲など幅広く、またコーラスはベラルーシ語教育にも多くの力を注ぎ、子供向けの詩や読本を多く残した。ベラルーシ科学アカデミーの創立にも携わっている。両者ともベラルーシの美しい自然や農村での苦しい生活を力強く描写する作品を残しており、その多くが現在でも義務教育における必修の文学作品として選ばれている。国民的作家として、根強い人気がある。しかし、ベラルーシ文学界を代表するクパーラとコーラスが農村出身だったことや、ベラルーシ語で当時のベラルーシの人々を主題にしようとする、登場人物も農民、舞台も農村が多くなっている。

ベラルーシ民謡は文字通り、ベラルーシの民衆が長い時をかけて歌い継いだものである。結婚式

など祝祭日に歌われる特別な歌も多いが、自然や恋愛をテーマにした物が主流である。ベラルーシの農村では、一日の農作業を終えた後、あるいは農閑期に村人たちが集まって、このような民謡を毎晩歌うのが、最大の娯楽だった。ベラルーシの民族楽器はグースリ（スラブ琴）、ツィンバロム、各種の木製の笛が多く使われており、技術的に素朴な楽器が多い。これらの楽器も農作業の片手間に作る事ができる楽器として、普及したのであろう。

ベラルーシ料理の最大の特徴は、多様なじゃがいも料理である。ベラルーシではじゃがいもが主食で、国民一人当たりのジャガイモ生産量が世界1位である。もっとも、南米原産のじゃがいもが、ベラルーシに渡ってきたのは、300年ほど前である。それまではライ麦が主食だった。長い冬でも保存のきくジャガイモはベラルーシ人の主食となり、じゃがいも料理のレシピは500種類を超えているとされている。

ベラルーシの町の土産物店を覗くと、ロシアの土産物とは趣の異なる民芸品がたくさん売られている。ベラルーシの民族衣装には亜麻という植物から作った亜麻布が使われている。白い亜麻布に赤い糸で幾何学的な刺繍模様が施されているのが、典型的なベラルーシの民族衣装である。様々な色で流線型の模様が使われたロシアの民族衣装であるサラファンやルバーシカとは、ずいぶん違って見える。簡素な装飾で機能的な被服と言ってよい。この亜麻から作った各種の織物や人形、藁を編んで作った精巧な藁細工がロシアとは違った民芸品として目を引く。特に藁細工の種類多さには驚かされる。日常品である籠や動物の形をした置き物だけではなく、教会の扉にも藁細工で作られたものがあつた。その他、木工品や藁細工、陶器などがベラルーシの民芸品に多い。

こうして見てみると、ベラルーシの文化はベラルーシの農村部で農民が創った文化であると言ってよい。そしてまた、これらの文化の持つイメージが日本人の中にあるベラルーシのイメージに強いのも事実だ。しかし、それだけではベラルーシ文化の全てを言い表しているとは言いがたいことになって気がついた。

ベラルーシの歴史を振り返ると、ベラルーシの大地にはのどかな畑ばかりが広がっていたわけではないことが分かる。リトワニア大公国の地として、貴族が各地に公国を構え、城を築き、富を集めていた面もまたベラルーシの一面である。ベラルーシは西ヨーロッパとモスクワをつなぐ東西の街道と、バルト海と黒海をつなぐ水運が交わる交通の要所に位置し、各国の商品を乗せた商船が行き交っていた。中国製の絹織物などもベラルーシの地にもたらされている。このような文化交流、そしてベラルーシ国内での文化熟成を担ったのは、貴族たちだった。ベラルーシを治めていた貴族の中で最も有名で、かつ最も裕福だったのはラジビル一族である。ラジビル一族はベラルーシ中央部にある都市ネスヴィシュを代々治めていた。

代表的ジャガイモ料理：ドラニキ



スメタナ（サワークリーム）をかけて召し上がれ！

油っこいような気がしますが、意外とすっきりした食感です。

家庭によりさまざまなドラニキがあります。

玉ねぎやハム、ソーセージの微塵切りを混ぜたりします。

それから、2枚の基本ドラニキを焼き、中に挽肉を挟んだりすることもあります。いろんなドラニキに挑戦してください。

もともとネスヴィシュはその土地の指導者的役割を担った一族がネスヴィシュ公を名乗っており、1223年には、カルカ川のほとりでユーリー・ネスヴィシュ公がタタール軍と戦ったことが年代記「過ぎし年月の物語」に記されている。14世紀初め、ネスヴィシュ公国はリトワニア大公国の支配下に入り、1496年（1492年説有り）ネスヴィシュの町はネスヴィシュ公からキシカウ家というポーランド人大領主に譲渡された。そのキシカウ家の娘、ハンナは1513年にリトワニア大公国の名門貴族ラジビル家の公爵イワン・ミカラエビッチ・ラジビル（別名、髭公爵）と結婚し、その後ラジビル一族が代々ネスヴィシュを治めることになった。ハンナ・キシカウと髭公爵イワン・ミカラエビッチ・ラジビルの間生まれたのが、ミカライ（ニコライ）・ラジビル（別名、黒公爵。1515 - 1565）である。この黒公爵ニコライ・ラジビルがネスヴィシュ繁栄の基礎を築いた人物で、彼の治世にネスヴィシュはリトワニア大公国の中でも最も強力な公国の一つになった。



ネスヴィシュ城の祭日：ベラルーシ民族衣装のお嬢さん（1993年）。

ミカライ公爵の息子ミカライ（ニコライ）・クリストファー・ラジビル・シロトカ公の時代には現在にも残るネスヴィシュ城が建設された。城の建築のためローマからイタリア人の建築家ヤン・マリヤ・ベルナルドニーが招かれた。シロトカ公がネスヴィシュを治めていた時期である1586年に、ネスヴィシュの町はマグデブルグ法（中世ドイツ都市法）によりヨーロッパの都市として認められた。シロトカ公はシリア、パレスチナ、エジプトなどへ行き、そこで見聞したことを旅行記にまとめ、1601年に出版した。その後1662年までの60年間に、その旅行記はロシア語、ポーランド語、ドイツ語、ラテン語に訳され、全部で19回版を重ねたことが分かっている。シロトカ公がエジプトまで行ったのは、ミイラに興味があったためで、公自身がその作り方を研究した。シロトカ公を初め彼以降のラジビル一族は死後ミイラにされ、今日までそれが残っている。

ヨーロッパの片田舎と思われがちなベラルーシであるが、ラジビル一族の歴史を紐解くと、その富と繁栄はヨーロッパ有数のものであったといえる。またこのようなエピソードが残っている。

ロシアはピョートル大帝の時代から、領土拡張をもくろんでおり、隣のリトワニア大公国はロシアに領土を奪われるのは困ると考えていた。リトワニア大公国領土内にあるネスヴィシュでも当然反ロシア気質が広がっていた。

西方に勢力を伸ばそうとしていたロシアの皇帝エカテリーナ2世はネスヴィシュの情報を得ようと、使者レプーニンを送り込むことにした。それを聞いたネスヴィシュ公はロシアの使者の度肝を抜こうと考え、レプーニンが城に到着するなり、まず花火を打ち上げ、300人の家来を迎えに立たせた。客人を通した「青の間」には、金銀宝石で作られた十二使徒像が並べられており、そこでロシアの使者を豪華な食事でもてなした後、地下にある宝物庫に案内した。レプーニンはエカテリーナ2世宛ての手紙にこう書き送っている。

西方に勢力を伸ばそうとしていたロシアの皇帝エカテリーナ2世はネスヴィシュの情報を得ようと、使者レプーニンを送り込むことにした。それを聞いたネスヴィシュ公はロシアの使者の度肝を抜こうと考え、レプーニンが城に到着するなり、まず花火を打ち上げ、300人の家来を迎えに立たせた。客人を通した「青の間」には、金銀宝石で作られた十二使徒像が並べられており、そこでロシアの使者を豪華な食事でもてなした後、地下にある宝物庫に案内した。レプーニンはエカテリーナ2世宛ての手紙にこう書き送っている。

西方に勢力を伸ばそうとしていたロシアの皇帝エカテリーナ2世はネスヴィシュの情報を得ようと、使者レプーニンを送り込むことにした。それを聞いたネスヴィシュ公はロシアの使者の度肝を抜こうと考え、レプーニンが城に到着するなり、まず花火を打ち上げ、300人の家来を迎えに立たせた。客人を通した「青の間」には、金銀宝石で作られた十二使徒像が並べられており、そこでロシアの使者を豪華な食事でもてなした後、地下にある宝物庫に案内した。レプーニンはエカテリーナ2世宛ての手紙にこう書き送っている。

「そこには金の延べ棒が積み上げられており、全部で1500キロ以上はありました・・・。」

さて、エカテリーナ2世は1772年の第1次ポーランド分割後、ロシアの勢力を伸ばし、命じてネスヴィシュ城内にあった2万冊の書物をサンクト・ペテルブルグに運ばせた。その後この書物はソ連の科学アカデミーの所有となって保管されていたが、その大部分は1982年の火事で焼失してしまう。しかし、この書物のほかに50万点の文献資料が城内に隠されていた。ピョートル大帝やポーランド国王からの書簡などであるが、これらの資料は現在、ベラルーシ国立歴史資料書庫に保管されている。

1812年、ナポレオンのモスクワ遠征が始まると、当時の城主ドミニク・ラジビルはフランス軍がベラルーシを通過したとき、ナポレオンに協力を申し出て、自分の兵士を提供した。やがてフランス軍が敗走し始め、フランスに協力したネスヴィシュの城はロシア皇帝軍に包囲されてしまった。包囲の直前にドミニクは執事アダムに城の財宝を隠すよう命じて逃走した。ドミニクはすぐロシア軍に捕らえられたが、その時すでに瀕死の重傷を負っており、間もなく死んでしまった。そこでロシア軍はアダムを捕まえ、財宝のありかを白状するよう拷問にかけたが、アダムは口を割らず、拷問のときの怪我のため死んでしまった。こうしてラジビル一族の宝のありかも闇に葬られてしまったのである。ロシア軍は財宝を見つけることができなかった。

その後、第一次世界大戦時と第二次世界大戦時に、ドイツ軍がネスヴィシュ城を占領したときも、この財宝を探そうとあちこち掘り返したが、見つからなかった。ネスヴィシュ城の地下は迷路のようになっていて、1万人が生活できるほどの地下要塞になっている。そのどこかに十二使徒像と金の延べ棒が隠されていると考えられているが、21世紀になった今もまだ見つかっていない。

ロシア革命が起こったときに、ラジビル一族をはじめ、ベラルーシの貴族たちはヨーロッパに亡命した。このとき、貴族が創り上げてきた農村文化とは異なる文化がともに、ベラルーシの地からほぼ消えた。こうしてベラルーシには前述のような農村文化だけが残ったのである。そのため、現在のベラルーシの文化と言え、農村色の濃い物しか挙げることができない。

ではベラルーシ文化の双翼の一つであった貴族文化とはどのような物であったのか。残念なことに現在のベラルーシでその面影を目にすることは難しい。美術館や博物館、貴族たちが暮らしていた城や屋敷跡などを尋ねて、初めて知るものが多い。わずかな貴族文化の面影をかき集め、想像するしかない。彼らが身に着けていたものは亜麻ではなく、絹に毛皮に甲冑。聞いていた音楽や舞踊も農村で歌われていたものとは違い、ゆるやかで優雅なものであった。つくづく、文化というものはその担い手の存在によって、生き続けることができるものだと思わされる。

最近になってこうした中世貴族の繁栄を現代に蘇らせようとする動きが広がりつつある。中世文化愛好家らがベラルーシ各地でクラブを作り、古き良き時代のベラルーシを再現しようと試みている。現在の暗い世相に目をつむり、繁栄していた頃のベラルーシの姿を見ようとしている。そんな心理が働いているのではないかと感じる。しかし、このような文化再発見の動きが広がれば、世界のベラルーシに対する認識も将来変化していくかもしれない。

貴族文化と農民文化がベラルーシ文化の二本柱であり、ロシア革命以後、後者のみが残った、という考えに行き着いたのであるが、よく考えてみると、前者の貴族文化の担い手たちとは何者だったのだろうか？ 貴族と一括りしているが、ラジビル一族はもともとリトワニア大公国を代表する一貴族で、土着のベラルーシ人ではない。ポーロツク公国をはじめとする、ベラルーシの各公国を治めてきたラグバルドとその子孫たちはどうか。彼らもスカンジナビアからやってきた民族であり、ベラルーシ人

とは異なる。

つまり、ベラルーシにおける貴族文化とは、異民族が創った文化であるとも言える。そういう視点から振り返ると、やはり、ベラルーシ人による純粋なベラルーシ文化とは、昔から今日まで綿々と続いていた農村文化だけなのかもしれない。

◇ チェルノブイリ原発事故と被災者救援について

▶ チロ基金とビタペクト2配布活動

言うまでもなくベラルーシが持つもう一つの大きな顔、それがチェルノブイリ原発事故だ。

私は1997年に創立されたチロ基金という日本のNGOの現地責任者として、チェルノブイリ被災児に対するささやかな救援活動を行っている。現在の主な活動は体内に蓄積した放射能を排出する働きを持つ健康食品「ビタペクト2」を、日本人からいただいた善意の寄付金により購入し、チェルノブイリ被災児に無償で配布する活動である。

ビタペクト2はりんごから抽出したペクチンにビタミンやミネラルを混ぜた粉末状の健康食品で、水に混ぜるとジュース状になる。1日ティースプーン2、3杯分の分量を摂取し続けるだけで、放射能が体外に排出される。ペクチンには放射能を吸収し、体内に排出する働きがあることは認められているが、放射能汚染地域で暮らし続け、毎日放射能に汚染された食品ばかり食べている人にとっては、少々のペクチンを摂取しても、体内に蓄積された放射線量が多すぎるため、最低1日3キロ分のりんごを食べなくては、必要量のペクチンを摂取することができない。

効率よく、また大量にペクチンを摂取できるように開発されたのがビタペクト2である。ティースプーン1杯で、りんご1キロを食べたのと同じだけの量のペクチンを摂取することができる。その成分については以下の通りである。



ビタペクト2（150g入り）

<1回分の摂取量（5g）に含まれるビタペクト2の栄養成分とその含有量>

ペクチン	4 3 5 3 mg	サッカリン	2 0 mg
ビタミンB12	0. 6 μg	乳糖	1 5 0 mg
ビタミンB2	0. 2 mg	カリウム (K)	1 2 5 mg
ビタミンB6	0. 7 mg	セレン (S e)	0.015mg
葉酸	4 0 μg	ベータ・カロチン	1 mg
ビタミンC	2 0 mg	亜鉛 (Z n)	3 mg
ビタミンE	3 mg	エネルギー	(100g 当り) 3 9 5 k c a l

ビタペクト2はミンスクにある放射能防護研究所「ベルラド」が製造販売しているため、ベラルーシ在住の私としては、ベラルーシ国内で安価で救援物資が調達できるという利点がある。2002年からこの活動を始めて、2005年4月現在、計820個（のべ820人相当分）のビタペクト2を

配布した。配布先は国内の様々な地域に住むベラルーシ人だが、主にミンスクに近いボロブリャヌイ市にある SOS 子ども村という私立系施設へ保養のため滞在する母子に配布している。SOS 子ども村はオーストリアの団体が運営している孤児院だが、その一角にチェルノブイリ被災児を対象とした保養施設がある。そこへ3週間を1サイクルとして、放射能汚染地域に住む子どもが、母親とともに保養のため滞在している。

母子は SOS 子ども村に到着すると、まずベルラド研究所へ行き、体内の放射能を測定する。測定費用は SOS 子ども村が負担している。測定の結果、体重1キロ当たり20ベクレル以上の放射能が検出された場合、ビタペクト2の配布対象とされる。SOS 子ども村からの連絡を受け、必要数のビタペクト2をチロ基金に集まった寄付金から購入し、子どもたちに配布しているという方式を採っている。SOS 子ども村にはベラルーシ各地の放射能汚染地域から子どもたちが集まる。そのような地域へミンスクからビタペクト2を搬送するより、経費が少なくてすむので、小さな基金としては助かっている。

ビタペクト2の効果について、いくつかの事例を挙げる。

(事例1)

2003年3月 SOS 子ども村へ保養に訪れ、ビタペクト2を渡したブレスト州ピンスク地区ソシノ村から来た3人の子ども。体内放射能値を測定したところ、12歳の女の子は体重1キロあたり30ベクレル、10歳の男の子は20ベクレル、この二人の7歳の妹は35ベクレルだった。ビタペクト2を1個ずつ渡し、保養期間中に飲んでもらった。その後この兄弟は2003年7月にミンスクへ来る機会があったため、ベルラド研究所で再測定した。その結果、12歳の女の子はND（検出限界以下）、10歳の男の子は8ベクレル、7歳の女の子はNDだった。

(事例2)

2004年11月に SOS 子ども村へ保養に訪れ、ビタペクト2を渡した家族が2005年1月に再検査をした。

この家族の第1回目の測定結果は、体重1キロ当たりの放射能値が、7歳の男の子が26ベクレル、5歳の女の子が32ベクレル、4歳の女の子が31ベクレル、2歳の女の子が43ベクレルだった。4人の子どものうち、2歳児以外の3人にビタペクト2を渡した。（ビタペクト2は3歳以下の年齢の子どもには飲ませてはいけないことになっている。まれに下痢を起こす恐れがあると、ベルラド研究所は説明している。）

子どもたちは3週間の保養滞在中、ビタペクト2を飲み、その後ゴメリ市へ帰宅した。2005年1月にベルラド研究所で再検査した結果、ビタペクト2を飲んだ子どもは、3人ともNDという結果が出た。

(事例3)

2004年1月、2004年7月、2005年1月の計3回測定をした家族のケースがある。6人兄弟の子どもたちであるが、2004年1月、1回目の測定は地元（ゴメリ州カリニコピッチ市）にやってきたベルラド研究所の派遣調査で、集団測定を受けた。

6人兄弟全員、44～47ベクレルの間の数値が測定された。本来なら1人1個飲まないといけないのだが、家庭の経済事情から、ベルラド研究所から直接購入した3個のビタペクト2を6人で分け合っただけ飲んだ。

半年後、2004年7月、SOS 子ども村で保養中に行った2回目の測定で、末子を除く5人の子ども

には次のような結果が出た。

13歳 31ベクレル
11歳 26ベクレル
8歳 28ベクレル
6歳 33ベクレル
5歳 13ベクレル

第2回目の測定後、チロ基金からビタペクト2を1個ずつ配布し、飲んでもらった。さらに半年後、2005年1月に3回目の測定を行った。その結果、全員に放射能値の低下が見られた。

13歳 18ベクレル
11歳 14ベクレル
8歳 5ベクレル
6歳 22ベクレル
5歳 5ベクレル



ベルラドの体内放射能測定装置：椅子の背もたれにNaIガンマ線検出器が入っている。セシウム137の検出限界は体重1kg 当り5ベクレル程度。2004年12月。

残念なことにビタペクト2を摂取した児童が全員再測定を受けられるわけではないので、ビタペクト2の効果を示すデータがたくさんあるわけではない。しかし、上記に挙げたデータでは、確かに体内放射能値の低下という効果が表れていることが分かる。

2005年4月現在、合計36回に及ぶビタペクト2配布をおこなったが、そのたびに母親に子どもの健康に関する聞き取り調査を行っている。詳しくはチロ基金の活動報告を公開しているHP「ベラルーシの部屋」(<http://belapakoi.s1.xrea.com/>)で調査報告を行っているが、ここで簡単にまとめるとこうなる。

- ・免疫力の低下（風邪を引きやすく、罹るとなかなか治らない。）
- ・骨の成長に関わる疾病（身長が伸びない。足が痛む。）
- ・血液に関する疾病（血液の成分の異常。貧血。）
- ・心臓に関する疾病（不整脈。先天性異常。後天性異常。健康に生まれた子どもが幼少時、突然不調を訴え、異常が見つかる。）
- ・甲状腺の肥大（放射能地域に住む子どもたちの多くに見られ、現在では少々肥大していても、誰も驚かないし、注意もしない。治療も行われていない。）
- ・その他の内臓疾患（最も多いのは胃炎。また腎臓病など。）

「健康上の問題はない。」という子どもたちも半数を占める。チェルノブイリ原発事故発生から20年近く経過し、高放射能を被曝して重度の放射能障害が発生し、重症化する、といった子どもたちの数は激減しているように感じる。その代わりに、低放射能を日常的に食品などから摂取し続け、それが体内に蓄積し、ある日突然発病し、あるいは慢性的に軽症の病気を抱えている、という子どもが増えてきている。今日健康だと診断された子どもも、いつ発病するか分からない。爆弾を抱えて生きているような印象を受けている。ビタペクト2は子どもたちが抱えている爆弾をとりあえず一度リセットしてくれる。少々残念に思うのは医薬品ではないので、病気そのものは治せず、あくまで予防措置であるということだ。健康だ、と思っている子どもでも、体内放射能値を測定してみると、意外と高

い値が出ることもあり、ビタペクト2を渡している。

➤ チェルノブイリ被災者に対する国の支援策

・被災児童への支援

チェルノブイリ事故で被災し病気となった子供たちのために、以前は「チェルノブイリ原発事故に関係する18歳以下の罹病者支援策」（1994年発効）というものが定められていた。それによると、このような特典があった。

(1) 手当金の支給。額は国が定める最低限額の年金と同額とされ、物価の変動に合わせて調整される。月に1回の支給。

(2) 健康被害に対する賠償金の支給。額は国が定める最低賃金の2.5倍の額。支給は1回のみ。

(3) 医薬品購入助成金。額は国が定める最低賃金の3倍の額。支給は1年に1回。

この文章だけではどのような支援策なのか分かりづらい。物価の変動もあるため、説明が難しいが、たとえば(1)の手当金はベラルーシ人の平均月給のおよそ10分の1の金額である。(2)の賠償金は日本円にして2万円程度。(3)の医薬品購入助成金は2000円程度であった。

上記の被災児支援策は、事故発生当時すでに生まれていた人のみを対象としており、その後出生した児童に対しては適用されない。従って、チェルノブイリ原発事故発生から19年が経過した現在、未成年のための被災者支援対策は実体が消えてしまった。

一般的な児童支援策として、居住地にかかわらず、身体障害児認定を受けた児童、多子家庭児童（ベラルーシでは一つの家族に3人以上子どもがいれば、多子家庭として認められる）、生活困窮家庭の児童である認定を受けた場合は、それぞれの条件に準じた支援を受けることができる。つまり、汚染地域に生まれ育って体内に放射能が大量に蓄積していることが科学的に証明された子どもでも、特別な支援はなく、チェルノブイリ被災児かどうかは区別せず未成年者としての特典だけが与えられている。

ちなみにベラルーシでは基本的に医療費は無料である。国立の病院や診療所に行けば、診療は無料で受けられる。最近都市部に多く設立された私立系のクリニックなどでは、有料となる。後者の場合、高額の治療費を払うため、医療器具の品質がよく、また患者数も少ないため、きめ細かい対応をしてもらえる場合が多い。しかし、高い治療費を払えないため、このようなクリニックには行けないというベラルーシ人も多い。また私立系クリニックでは入院施設を持たないため、入院を必要としない治療や検査、簡単な手術なら受けられるが、そうでない場合は国立系の病院へ行かなくてはならない。

国立系の医療機関は、国の経済難から、設備が老朽化していたり、また混雑していて、十分な治療を受けられなかったりする。また薬品代は薬局で購入するよう処方箋で指示された薬品は患者の負担となる。入院中に治療のために定期的に服用しなくてはならない薬や、注射液などは無料である。子どもが3歳になるまでは、薬局での薬品購入は、割引料金となる。ただし、ビタミン剤などの栄養補給剤、医薬部外品、包帯などの衛生用品、非常に貴重な薬品や特殊な薬品などは割引の対象から外されている。

・汚染地域からの移住者および事故処理作業員への支援

当時放射能汚染地域で暮らしていた人々は100万人と言われている。すでに死亡した者もいるが、現在生存している全員に特典など特別な支援をしているわけではない。政府の財政難のため、強制移

住の対象となった高放射能汚染地域居住者と事故処理作業員（リクビダートル）だった人々とその家族が支援の対象となっている。本人が死亡した場合でも、事故処理作業に従事していたことが証明されれば、その家族も支援の対象となる。

主な支援の内容は、次の通りである。（以下の支援策は1991年に定められたものである。）

<強制移住の対象となった高放射能汚染地域居住者に対する支援策>

- (1) 高放射能汚染地域居住者は国内の他の地域に移住できる権利を持つ。
- (2) 移住に伴い、転職しなくてはならない場合、優先雇用される。
- (3) 4ヶ月間の就職活動中、給料と同額の賠償金が国から支給される。またそれに1ヶ月分の給料と同額の補助金が支給される。
- (4) 家庭の扶養者が就職活動中、扶養家族に1人につき扶養者の月給の25%の額の生活助成金が支給される。
- (5) 移住の際、旧住居内にあった家具や家畜などは放射能に汚染されている可能性があるため、移住先に移動させてはいけない。その賠償金は国から支給される。
- (6) 移住のため国が用意した住居への優先入居。
- (7) 年金生活者、障害者が親類の住む地区へ移住することを希望する場合、同地区内の住居を国が支給する。
- (8) 移住のため住居を購入する場合、銀行から無利子の借り入れをすることができる。
- (9) 正規の有給休暇以外にも、2日間の有給休暇を追加で取ることができる。
- (10) 児童が療養所などへ行く場合、その保護者1名は1日の有給休暇がもらえる。
- (11) 高等教育機関への進学を希望する場合、優先入学できる。また寮への優先入所処遇。
- (12) 高等教育機関に入学した者に対し、一般学生より1.5倍増額した奨学金を支給。
- (13) 高放射能汚染地域に継続して居住を希望する者に対し、助成金支給。
- (14) 高放射能汚染地域以外に居住する者が、就労のため、高放射能汚染地域に滞在する場合、就労時間は1週間に36時間以内とする。
- (15) (14)の就労者に対し、有給休暇の期間を増やすこと、また滞在中、1日に3回の暖かい食事が無料で与えられなければならない。
- (16) 高放射能汚染地域で12ヶ月間、勤務した軍人は正規の有給休暇以外にも、14日間の有給休暇を追加で取ることができる。

<事故処理作業員を対象とする支援策>

- (1) 健康被害に対する賠償金の支給。支給は1回のみ。
- (2) 治療助成金。支給は1年に1回。
- (3) 治療のための医薬品代は無料。
- (4) 義歯の購入費、またその修理代は無料。
- (5) 男性は50歳（ただし20年以上の就労経験を有する者）、女性は45歳（ただし15年以上の就労経験を有する者）で定年退職できる。年金の額は1級障害者の場合は2倍。2級障害者の場合は70%増。3級障害者の場合は50%増の額とする。（筆者注：ベラルーシでは身体障害者は障害の程度に応じて1級から3級までのカテゴリーに分けられる。1級が最も重く、3級が最も軽い。またベラルーシの一般的な定年は男性60歳、女性55歳である。）
- (6) ホームヘルパーの無料派遣。障害者となり、世話をする家族や親戚が身近にいない場合。
- (7) 就労している障害者が、1年に4ヶ月以内の範囲で勤労できなかった場合も給与は全額支給される。
- (8) 1年に1回、療養所の無料滞在。あるいは滞在しないかわりに滞在費用を給付金として受け取ることができる。
- (9) 療養所に滞在中は有給休暇扱いとする。
- (10) 正規の有給休暇以外にも、14日間の有給休暇を追加で取ることができる。
- (11) 給与に課せられる税金の全額免除。
- (12) 現在居住している国営住居を私有化する際の手数料を全額免除。
- (13) 住宅管理費を50%助成。また光熱費、水道代、ガス代も50%助成。
- (14) 居住地と医療施設間の往復の交通費無料。公共の交通機関、近郊までの列車料金は無料。
- (15) 1年に1回、ベラルーシ国内から国内への陸路移動交通費は無料。

- (16) 自力での移動困難者と医師が認めた場合、自家用車1台が国から支給される。
- (17) 居住者一人当たりの住宅の居住面積が少ない場合、申請すれば無料で広い住居を支給。
- (18) (17)の理由で住宅を申請したが、空いている住居がないなど、すぐに支給できなかった場合、国が新しく建設した住居に優先入居できる。
- (19) 住居を購入する場合、その額は50%割引となる。
- (20) 高等教育機関への進学を希望する場合、優先入学できる。また寮への優先入所処遇。
- (21) 高等教育機関に入学した者に対し、一般学生より1.5倍増額した奨学金を支給。

こうして見てみると、たくさんの支援策があるように思える。しかし、高放射能汚染地域居住者に対する支援策の(15)の「無料で1日3度の暖かい食事」など、誰がどのように負担して支給するのか細かい部分がはっきりしていない施策もある。賠償金の額なども明確ではなく、詳しいことは相談に訪れた際に尋ねよ、ということであるらしい。

さて、現在問題となっているのは、上記の支援策のうち、給付金や助成金など現金の支給額を減らすことが検討されている点である。政府の財政難も理由の一つだが、次のような現実がある。

事故処理作業員の多くが若くして急死するケースが多く、他の事故処理作業員だった人々は、「いつかは自分も同じように突然死ぬのか」という強い不安を抱いている。また、慢性病を疾病している人も多く、健康に全く自信がない、という場合が非常に多い。突然死の不安、闘病生活の疲れ、病気による失業、将来に対する悲観・・・といった精神状態に陥った人が多く、心理的なストレスから開放されたいがために、飲酒に走る者が増加する一方なのである。

このような被災者はせっかくもらった給付金を、飲酒のために浪費してしまう。つまり支援策を講じた結果、事故処理作業員にアルコール中毒患者が増えてきているのである。ウオッカ代に給付金が消えてしまうのであれば、被災者支援の意味がない。家族の中には、「事故処理作業員だった夫の給付金ですが、アルコール中毒症である本人には直接渡さないでください。」と懇願する妻も多い。そのような場合、被災者である本人ではなく、家族の一員である受取代理人にしか給付金を渡さない、といった家族に対する救援を優先した措置を取っているケースもある。

このような状況を踏まえ、チェルノブイリ事故被災者への救援策は方向の転換期を迎えている。個人個人に給付金を渡すのではなく、その予算を、事故被災者が就職できる職業センターのような施設を創立するために使うほうがいいのではないかと、という案がある。事故後、病気などで本来の職を失った被災者が、自発的な労働意欲を持って、働くことができる職場を与え、働きに応じて給料を支払うほうが、被災者の精神的な安定、生きがいの再発見、アルコール依存者の減少などの効果が期待される、という考えである。現在のところ、このような政府案がどのように展開するのかは分からないが、チェルノブイリ原発事故被災者の支援策が見直され、大きく変化する時期に入ったことは間違いない。

このようにして振り返ってみると、給付金の支給も大切だが、被災者の心のケアも大切な支援だと思われる。幸い、前述のように外国人差別をしないベラルーシ人の間で、被災者を非被災者が差別する、といった問題現象は起きていない。チェルノブイリ問題は個々人の心の中に深く根ざしている。事故発生から20年を迎え、被災したかどうかにかかわらず、記憶を過去に押しやろうとする人も多い。放射能の場合、それが目の前にあっても存在を感知できないのだから、忘れることも簡単だと思う。しかし、チェルノブイリ原発事故はベラルーシの歴史の中で最も特異な悲劇だ。

数々の戦争のため、そのたび人口が減ったベラルーシ人。戦争で死んだ人は生き返ることはないが、生き残った人々は子孫を残すことができた。戦争といった多くの困難をくぐり抜け、運よく生き延び

た人々の子孫が現在、ベラルーシ人として生きている。

しかし、チェルノブイリ原発事故が戦争と大きく違うのは、その後遺症が生き残った人の中に棲み続けることだ。そして何代にも渡って影響は受け継がれる。事故発生直後は亡くなる人も多かった。しかし、亡くなった人の数の何百倍、何千倍もの多くの人は放射能と共に生きなければならない。放射能と共に生きる、というのはどんなことであろうか。そして、どうすれば、この事故の悪影響を完全に消すことができるのだろうか。そうして初めて、この事故のことを過去のこととして語るができる。忘れようとすることは実は簡単にできない。

原子力発電は人間の知恵によって創られた。チェルノブイリ原発は電気を供給し、人々の生活に恩恵を与えたはずだ。しかし、それ以上に多くの人の健康に被害をもたらし、生活、そして人生を狂わせた。ビタペクト2もまた人間の知恵によって作られた物の一つである。人間の知恵が犯した失敗も、人間の知恵を持ってすれば回復することができると思いたい。

(主要参考文献)

- ・ Я.Найдзюк І.Касяк 『Беларусь,учора і сьня』 Навука і тэхніка 1993
- ・ В.Ю.Ластоускі 『Кароткая гісторыя Беларусі』 Універсітэцкае 1993
- ・ М.П.Касцюк(рэд.) 『Нарысы гісторыі Беларусі』 Беларусь 1994
- ・ Б.Сачанка(рэд.) 『Ілюстраванная Храналогія гісторыі Беларусі』 Беларуская Энцыклапедыя 1995
- ・ Я.К.Новік Г.С.Марцуль 『Гісторыя Беларусі』 Вышэйшая школа 2003
- ・ О.А.Яновский 『История Беларуси』 Юнипресс 2003
- ・ Я.В.Малашэвич(рэд.) 『Чарнобыль』 Беларуская Энцыклапедыя 1996
- ・ Центр гендерной информации и политики Министерство социальной защиты Республики Беларусь, Представительство ООН в Республике Беларусь 『Информационный бюллетень No. 28 — Правовые гарантии социальной защиты семьям,воспитывающим детей-инвалидов』 2000
- ・ М.Дзелянкоускі В.Дранчук 『Нясвіж』 Беларусь 2000
- ・ 川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹監修 『ロシア・ソ連を知る事典』 平凡社 1989年
- ・ 服部倫卓 『不思議の国ベラルーシ』 岩波書店 2004年
- ・ 服部倫卓 『歴史の狭間のベラルーシ』 東洋書店 2004年